特集

がんばれ！北海道

開拓の群像特集

合田 一道

歴史から見えるもの㉕

腹を切った外国奉行

堀 利熙

堀 利熙

堀 利熙（ほりとしひろ）は幕府の箱館奉行を務めた後、外国奉行（いまの外務大臣）になりますが、プロシア（現ドイツ）との通商条約の締結までこぎつけながら、突然、腹を切って死んでしまいます。でも利熙は最後まで外国との交渉に、全身全霊で当たったのでした。

利熙は文政元年（一八一八）、幕府大目付を父に生まれました。小姓組から徒頭になり、老中阿部正弘に抜擢され、嘉永六年（一八五三）、目付になり、海防掛を担当します。

着任一ヵ月後の六月、わが国を揺るがす事件が起こります。アメリカのペリー提督率いる黒船が浦賀にやってきたのです。幕府はうろたえ、どう対処すべきか諮問しました。利熙は国交拒絶論を主張しましたが、結局、開国へと舵を切ることになります。

大砲製造掛に移った利熙は、翌安政元年初夏、樺太を視察して、わが国の防備があまりに脆弱な事実を知ります。その秋、日米和親条約が、さらに日英、日露和親条約が結ばれ、箱館港が下田港とともに開港になると、利熙は箱館奉行に任じられ、従五位織部正の叙位を受けます。別に掘織部正とも呼ばれるのは、このためです。

ここで利熙は、箱館港に入港する外国船を通じて世界の大勢を見聞し、幕府に対して外国と対等の通商を始めるよう答申しました。それには不平等な和親条約ではない条約が必要と感じたのです。

そのころ蝦夷地と呼ばれた北海道内に、恐ろしい疱瘡が蔓延していました。利熙は各地を巡視し、医師を派遣して和人だけでなく、アイヌ民俗にも種痘を施しました。

安政五年（一八五八）六月、日米通商条約の交渉がまとまり、調印の寸前、利熙はロシア、イギリス、フランス三国使節との応接準備を命ぜられました。同時に各国通商条約締結の際の全権の一人になりました。この日米通商条約の調印は、勅許が下りず、幕府内は紛糾していました。

利熙はこうした最中の七月、こんどは新設の外国奉行の兼務し、翌年六月に開港予定の横浜港を管轄する神奈川奉行をも兼務することになったのです。

この時期、幕府は通商条約と絡んだ別の難題を抱えていました。将軍家定の後継をめぐって大老井伊直弼は紀州の徳川家茂を担ぎ、一橋慶喜を推す水戸藩主徳川斉昭らと対立していたのです。

斉昭らは勅許を得ずに調印した井伊を責めたので、怒った井伊は斉昭らを処分しました。利熙はこの時、一橋側に加担していたのです。やがて井伊による「安政の大獄」が始まり、多くの志士が処刑されます。

恨みを買った井伊が桜田門外で討たれ、年号が安政から万延元年（一八六〇）に変わりました。公武合体による皇女和宮の将軍への降嫁が表面化する中の七月、プロシア使節オイレンブルグが来日し、通商を要求しました。応援に当たった利熙は、難航しながらも何とか条約案をまとめますが、その十一月六日、突然、自刃して果てたのでした。四十三歳でした。

自刃の理由は判然としませんが、井伊の暗殺や公武合体に対する朝廷の意向などで、幕府内が神経質になり、その緊張感が生んだ犠牲ではないか、と思えてなりません。

◆プロフィール◆

昭和九年（一九三四）、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。『定山坊行方不明の謎』で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』『人間登場～北の歴史を彩る』『大君の刀』など。